『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会） 第６巻　第３号　2004　81頁～91頁

高崎経済大学地域政策学会・平成１５年度第２回学術文化講演会
〈講演録〉

森は海の恋人「汽水の匂う州（くに）」

牡蠣の森を慕う会代表
畠　山　重　篤

私は牡蠣の養殖業をいたしておりますので、10月から牡蠣の水揚げのシーズンに入っていまして、このシーズンは本当に１日、１日が大事な、文字通りカキ入れ時なわけです。ですからこういう時期に仕事を離れますのは、非常に経済的には損害があるわけですけれども、高崎経済大学の地域政策学部の学生の皆さんに「牡蠣の目」を通して、物事を見ていくと何か地域づくりのためにお役に立つことがあるんじゃないかということも思っていましたので、今日は参りました。

別にみなさんに牡蠣の養殖方法を今日お話しするっていうことじゃなくて、あくまで牡蠣の目を通して、何が見えてくるか。それが地域づくりに非常な大事な要素があるっていう事を、私自身が十数年、漁師が山に木を植えるという運動をとおして見えてきたものですから、そういう観点から少し話をしてみたいと思います。

現在の私たちの生活は、高速道路や新幹線、それから私はできないけれども皆さんおやりになっているインターネットですね。こういうもので、人間の生活がなりたっているんですけれども、しかしもうひとつですね、絶対見落としてはいけないものが、私は牡蠣の養殖をしているからよくわかるんですけれども、川を通した流域ということを頭の片隅に置いておかないといくら交通網や通信網が整ったとしても、川を中心とした縦の関係も含めて地域を考えないと絶対に失敗するというような事を思っているわけですね。

私は三陸リアス式海岸の気仙沼湾というところで、牡蠣の養殖をやっているんですけれども、先ほどリアス式海岸の話もでましたから、そこから見えてくる話を先に話させていただきます。みなさんはもう学校でリアス式海岸っていう言葉を学ばれたと思うんですけれども、何でリアス式ってカタカナで書くか疑問だったっていうことがあるでしょうか？私が小学校のときに学校の先生から学んだときは、のこぎりのようにギザギザになっている海岸のことをリアス式海岸だって教わったんですね。それでギザギザの海岸だから、入り江になっていて沖合いの方から海の波が入り込まないから、いかだを浮かべられるので、牡蠣の養殖やわかめでも海苔でもそういう養殖業が盛んだという風に教わってきたんですね。ところが10年くらい前に、東京からスペイン料理の料理人が我が家に来たんです。スペイン料理の中で、例えばパエリアなんてのは聞いたことがありますか？このパエリア鍋の上に、黒い貝がのっているのをご存知では無いですか。あれはムール貝っていう貝

なんですよ。ムール貝は、スペイン料理には欠かせないんですけれども、我が家でもムール貝の養殖をしておりましたので、そのいいムール貝を探しに料理人が来ました。それで事務所の窓から入り江の姿を見てですね、「ああ何だかここは、ガリシアみたいね。」ってこう言ったんですよ。

これはスペインの地名でありまして、「ガリシアって何ですか？」ってまた聞いたらですね、「あなたガリシアって知らないんですか？リアス式海岸で有名なところです。」「え？リアス式の“リアス”って、もしかしたら、スペイン語ですか？」それで初めてスペイン語であることがわかったんですよ。リアス式海岸というのは、日本各地あちこちにあるんですけれども、そのなかでも宮城県と岩手県が有名で、牡鹿半島の石巻ということろから北に300キロずーっとギザギザの海岸が続いて一番大きいですね。日本海側で例えば、若狭湾なんていうのもあるんですけれども、ここもリアス式ですね。リアス式の語源というのは、「リア」っていう元々の言葉で、「ス」は複数のSなんですね。もともとのところはスペイン語で「リア」っていう言葉。なぜこんなことを言っているかと言うとですね、つまりリアス式海岸はその地域をどういう風にこれから振興させていこうとしたときに、肝心なですね、私も含めて行政も学校の先生もですね、リアス式海岸の「リアス」っていう意味を知らないでいたんですよ。自分たちが住んでいたところを、どういうところか知らないで地域政策をやろうとしたって、それはぜんぜんダメですよ。

それで、ギザギザのリアス式海岸て言いますから、私はこういう海岸は最初から海の波が削って出来た湾だと思っていたんですよ。ところがですね、リアス式の「リア」の語源を調べていくとですね、「リオー」っていう言葉なんです。リオはスペイン語で川ですね。川じゃないですか。それで、リアス式の「リア」っていうのは、日本語でどう訳されているかっていうと、潮入り川って書いてあるんですよ。海なのに「川」が出てくるんですね。それはこの「リオ」って言葉から発生した言葉だっていうことなんです。どういうことかって言いますと、リアス式海岸は川が削った谷という意味なんですよ。地球の気温が暖かくなると、両極の氷が溶けて海の水位が上がってくる。そうして川が削った谷に、ゆっくりですね海の水が入り込んでくる。これがリアス式、潮入り川っていう意味なんですね。だからギザギザの海岸ですとか、波が入らないから養殖業が盛んだとか、それは本質は全然捉えてないわけですよ。これは何が問題かといいますと、ギザギザの海岸に川が削った谷ですから、必ず湾の奥から川の水が流れ込んで来ていたんですよ。川は遡っていけば、利根川だって東京湾から遡って行けば、群馬県に来ます。今度はその背景の山々に行くでしょ。山々には森があるじゃないですか。問題は海の生き物が何を餌にして育っているのかってことなんですよ。それは塩水だけの問題かっていうとですとね、私は牡蠣を養殖していますから、元々はわたしも太平洋の方ばっかり見ていたんですけれども、反対側を見ることによってですね、その関係がわかってこういうことに関心がいったんです。つまり森林がありまして、木があって葉っぱが落ちるでしょ。葉っぱが落ちれば、土が腐りますね。腐葉土っていうんですけれども、そこに雨がしみ込んで、川にそれが溶けた水が湾の奥から海に流れ込んでいるんです。その水の中に、海の中の生物生産の元になっている植物プランクトンを育てるですね、養分が流れ込んでいる訳なんです。つまり単にギ

ザギザの海岸、波が入らない海って言うことが、海の生き物を育てるっていう事じゃなくて、海の生物生産の、基礎生産の元になっている植物プランクトンを育てている。まるで病気になった人間がブドウ糖の点滴をうけるのと同じようにですね、これが湾の奥から、川の水が湾の奥に運び込んでいるということなんですよ。だから結局ですね、森と川と海がマッチングした、そういう地域、それがリアス式海岸ということなんですね。

そうするとですね、そういう地理的特性を持っている地域を、どういう風に地域づくりをしていくかって言ったときに、例えば川から森の養分が流れてきて、それで海の生き物が育っているわけですから、だいたい水産業が基幹産業になっていますから、例えば川のくびれているところに、ダムを作ろうと計画をしたとしますね。そういうところをせき止めてしまうと、せっかく森の腐葉土を通ってきたものが海に届かなくなりますから、海は死んでしまいますよね。そうするとダムを作ったり、やたらとそこに高速道路を通そうとか様々な自然破壊をやってしまうと、肝心要な海が死んでしまうわけですよ。海を殺したんでは、いくら高速道路が出来たって、新幹線が近くまで来たって、海の魚介類が捕れなければ、運ぶものがなければしょうがないじゃないですか。

ここで海の食物連鎖について話しておきます。１キログラムのカツオがここにいたとしますよね。カツオは、何を餌に食べているかご存知ですか？カツオはイワシが主食なんです。最近イワシが捕れなくなって、高くなっていますけれども、イワシっていう魚は、魚ヘンに弱と書くのは、ご存知ですか？或いは別名ですね、海の米とも言われているんですよ。いろんなものの食べ物になっているんです。カツオが体重を１キログラム増やすのに、イワシをいくら食べたらいいかということなんですけれども、だいたい海の中では10倍食べなきゃいけない。１キロのカツオは、だいたい10キロのイワシを食べなきゃいけない。そうすると、イワシは何を食べていると思いますか？イワシは自分よりも小さいものを食べていますね。イワシが食べているものは、オキアミのような動物プランクトンです。そうすると、10キロのイワシは10キロ体重を増やすのに動物プランクトン、オキアミのようなものを10倍ですから100キロでしょ。それでカツオはイワシ、オキアミ、これは動物プランクトンですが、これは何を食べているのか。ここでですね、餌は植物に変わるわけですよ。植物プランクトンっていうのがあるんですよ。植物プランクトンていうのはですね、金魚鉢に水を張って、お日様の光に窓際で当てておくと、緑になるでしょ。ああいうものが淡水の植物プランクトンですね。例えば、ダム湖なんかにアオコなんていう植物プランクトンが大量に湧きますと、水が臭くなりますね。あれも植物プランクトンの一種です。じゃあ動物プランクトンが100キロ増えるのに、植物プランクトンは10倍ですから1000キロです。１トンですよ。顕微鏡で見なきゃ見えないものが１トンですよ。想像できないでしょ。つまり海の中って言うのは、最初に顕微鏡で見なきゃ見えないような植物プランクトンが１トン湧かないと、１キロの魚にならないんですよ。特にこの植物プランクトンっていうのは、途轍もない量が海の中で湧いているっていうことなんです。今、温暖化の問題が非常に取り沙汰されていますけれども、人類がですね、山の木を伐ってですね、それを燃やしているうちは、自然界の収支はだいたい一緒だったんですけれども、化石燃料

を使い出すようになって、どうしてもCO_2を余計使い出して、CO_2を酸素に変えてくれているものが山の木とか植物なんですけれども、そのバランスが今崩れていますよね。それで私どもは、陸上の山の木、例えば熱帯雨林なんていうアマゾン川の熱帯雨林の話もあります。あれもですね、熱帯雨林の山のほうだけ見ておりますけれども、あの大アマゾン川が流れ込むこの海の中、ここがどうなっているかという研究が、またそこに目をやっている人が少ないです。そこに海の大森林、植物プランクトンの大森林があるんですよ。っていうことに立脚して物事を考えていくとですね、利根川と群馬の山々と東京湾と、或いは太平洋というふうな理屈や関係が同じですから、問題がもっと鮮明に見えていると思います。最近の研究では海の森林が陸の全森林より２倍の光合成の力があるっていうことがだんだんと数字としてわかってきたんですよ。

つまり日本という国は、真ん中に山脈があってですね、太平洋には利根川が流れている。山一つ越せば信濃川が日本海に流れているじゃないですか。２級河川まで入れると３万何千本も流れ込んでいるわけです。そうすると、川が流れ込んでいる海のへり、そこは汽水域なんですけれども、この汽水域がですね、植物プランクトンが大発生している海の森なんですよ。そうすると今までのように、林学なら林学、川は川、海の学問は海学問、地域政策は高崎経済大、こういうようにばらばらに研究していたんじゃ、自然界のメカニズムはわからない。環境問題も解決しない。さまざまな問題が森と川と海との間には横たわっておりますから、総合的な視点が必要なのです。

もうひとつ進んで、例えば皆さんも水俣病のことはご存知ですよね。40年ほど前に熊本県の水俣というところで、チッソという会社が水銀を海に流してしまいまして、その水銀が食物連鎖で魚に行って、それを妊娠していたお母さんが食べて、ああいう悲劇が起こったんですね。この海の中に、水の中に溶け込んだ成分を最初にカラダの中に入れるのは、植物プランクトンなんですよ。例えば１トンの植物プランクトンに水銀が流れたとします。これがどうなるかというと、１トンの植物プランクトンが１キロに濃縮になるんですよ。ここに水銀が溜まる訳ですよ。これを食ったらひとたまりも無いってことですね。だからそれは40年も前の水俣病の問題だけでなくて、現代社会だっていつだって水俣病が起こる可能性があるんですね。例えば、学校だってちょっと前までは、どこか校庭の片隅あたりにゴミの焼却炉があって、そこでだいたい学校から出るゴミを燃やしていたじゃないですか。灰もその辺に散らかしていたわけですね。だけれども最近になってみんな学校から焼却炉が消えてますよね。小学校の子供たちに何でだって聞いてみますと、みんな答えますよ。「それはダイオキシンが出るからだ。」って。だから、この関係っていうのは本当に重要な関係なんですよね。

私は、うちの親父の代から牡蠣の養殖業をやっておりまして、私が２代目を継ぎまして、今３代目の息子が跡継ぎで牡蠣を作っております。おととし孫も生まれまして、４代目の男の子が生まれましたんで、たぶん４代目の孫も後を継いでくれるんじゃないかと思っております。だいたい自信もあるわけです。それは日本全体、或いは世界を考えても、前に比べて海が少しでも良くなっているっていうところはほとんど無いんですよ。どこの海岸、海辺に行っても、昔に比べたら本当に魚

が獲れすぎて困っているところは無くてですね、もうダメだ、ダメだっていう話ばっかりですね。ところが我が気仙沼湾はですね、すこしずつ確実にですね、海が甦ってきているわけですよ。これは何を見ているかっていうと、そのお金になるものもそうなんですけれど、海の中のちっちゃい生き物です。つまり動物プランクトンのようなものだとか、生まれたばっかりの魚の子供だとかですね、或いはヤドカリだとか、イソギンチャクだとか、タツノオトシゴだとか、ああいう連中がいますよね。海って言うのは要するに、そのお金になる魚介類が捕れるっていう以前に、そういう様々なちっちゃい生き物がいっぱいいれば、その海は非常に健全な海なんです。そういうものが一回ほとんどダメになったんです。けれども、私たちがやっております山に木を植えるっていうことから始まりまして、川の流域に住んでいる人たちが、すこしずつみんなで注意するようになって、我が気仙沼湾がすこしずつ良くなってきているわけなんです。本当に全国を探してもほとんど無いような事なんですね。それがそういう運動をしているとか、流域に住んでいる人たちがやっぱり自然を汚さないような意識を持っているということが、意外とメディアに、インターネットにすぐに乗りますから。

例えばスーパーで、仕入れの担当者が今何を見て、例えば牡蠣を仕入れるかっていうことです。これは皆さんの地域づくりとも関係してくるわけですけれども、やっぱり一番はその地域の海がいいか悪いか、どういう方向に行っているか。それからその川の流域に住んでいる人間が何を考えているか。農業、農産物でもそうです。美味いっていうこともそうですけれども、価格もそうですけれども、やっぱり安全なんですね。安全っていうことは、その川の流域に住んでいる人間がどういう気持ちを持っているかっていう事を見なきゃいけない。既に仕入れの担当者は、そういうところまで目が行っていますよ。それは何も牡蠣だけじゃなくて、その地域で捕れる諸々のものを、もちろん人間も含めると思うんですよ。その地域がどういうふうな価値を持って評価を受けているか。そうするとその地域で作っています、例えば気仙沼の場合は、水産加工品などもいっぱい作っていまして、塩辛の生産量も日本一ですかな。気仙沼ブランドの塩辛・缶詰・ふかひれなども多いです。さまざまなお店によってブランド力が高まっていく。ですからコマーシャルに今はお金をかけていますが、やはりその地域に住んでいる人たちが自然にすこしでもやさしく生活をしているというううわさが、どれだけの数字となるのか、コマーシャル効果となって出るのかと私はなんとなく感じています。

それで昭和40年代から50年代にかけまして、我が気仙沼湾も、本当に何も問題が無くて、牡蠣の子供を海にぶら下げれば、ひとりで植物プランクトンを食べて大きくなってくれたわけです。ですから非常に生活が安定しておったんですが、ある時期からですね、海が少しずつおかしくなってきました。それは日本の高度経済成長っていう、そういう時代がきまして工業優先になりましたから、そういうツケが空気にもいろいろ来ましたよね。だから空気が汚れて東京でも光化学スモッグが出たり、四日市喘息が出たり、公害って言われる時代ですね。それから水と一緒にさまざまなものが海に流れて来まして、どこの沿岸域もさまざまなそのシワ寄せが出るようになりました。私の

ようなものが住んでいる気仙沼っていう辺境の地でもですね、そういうことがどんどん起こるようになったんですね。

牡蠣の話に戻りますけれども、牡蠣っていうのは、人間と同じように呼吸をしているんですね。人間は空気を吸って吐いていますけれども、海の生き物は海水を吸って吐いています。それで魚にもエラっていうところがありますけれども、あそこを通して酸素を体の中に入れる。それから牡蠣もエラを通して酸素を体の中に入れます。酸素を通し、フィルターに植物プランクトンを引っ掛けて食べている訳ですよ。このなかに様々なやつがいまして、赤潮プランクトンもいるんですよ。だいたい牡蠣の身って白いでしょ。それがですね、赤い牡蠣が出るようになってきちゃったんですよ。人間の血液の色に似ているっていうので、なんと恐ろしいことに血牡蠣って言われるようになってまして、これは全く売り物にならないっていうことで、市場でも全部廃棄処分になったとか、そういう時代が、続いていたわけなんです。もうこういう商売はダメだなっていうことで、あきらめて海を捨てて、様々な職業に転出していった私たちの仲間も多いんですけれども、何とかならないのかなぁっていうようなことをずっと皆で話して来てました。けれども、なかなか海は良くならない。だんだん、だんだん悪くなる一方でありました。

たまたまそういういうときに、フランス料理では牡蠣をよく使うのですけれども、私はフランスに牡蠣の視察旅行に行きました。ずっと地中海のほうからフランスの沿岸部をずっと回っていったんですけれども、ブルターニュ地方というフランスの北の方に行きますと、そこにロワール川というフランス最大の川が流れています。ロワール川っていうのは、利根川よりでかいですね。フランス最大の川ですから。そこの河口に行って、同業者から牡蠣の養殖を見せてもらいました。牡蠣を開けてみましたら、非常に牡蠣の身がですね、白くていい肉をしておりまして。牡蠣の健全度はどこを見たらいいかといいますと、蓋を開けて牡蠣の殻の内側ですね、ここが真珠層っていって、固くなっているんですけれども、叩くとものすごい金属音がしてですね、この硬い殻でこの海はいい海なんだなってことがすぐわかりました。それがそこに流れ込んでいる川がやっぱり綺麗なんだなっていうことも直感的にわかりました。それで川をだんだん上がっていきましたら、今度は川魚の看板がでているんですね。カワマスの看板だとか、コイの看板だとか。それでずっと川を遡って行きましたら、ロワール川っていう川の流域の自然が非常に保たれているっていうことが良くわかってきました。後で聞いたんですけれども、フランス政府が特に力を入れてそこの川の流域を保全しているっていう意味もあるらしいです。それからさらに上流に行ってみました。そしたら、レストランの看板がですね、シカとかイノシシとかクマとかそれから山の鳥ですね、キジとかヤマドリとかウズラとかそういう絵に変わってくるわけですよ。面白いなぁと思いました。それで周りを見ましたらですね、今度は山の木がですね、いつのまにか落葉広葉樹つまりクリとかナラとかブナとかシイとかそういう葉っぱが落ちる広葉樹の森に山が変わっているわけですよ。フランス人っていうのは、フランス料理で何の料理が一番好きかというと、ジビエ料理って言ってですね、野生の鳥だとか、動物の料理が好きなんですね。ウサギ料理が。私はハッと思いましたね。フランス人は美味し

い料理の素材を守るために、森をちゃんと残しているんだなと。落葉広葉樹のちゃんとした森で保全しておくと、当然川も綺麗なんですよ。そうすれば川の魚も捕れるじゃないですか。ウナギも当然上がってくるでしょ。海へ行けば牡蠣もいるし、オマールエビもいるし、フランス人は食欲の用から自然を守っているんだなと思いました。それで、私も下流域で牡蠣を作っているんだけれども、美味しい牡蠣を作るにはやっぱり森と川と海を今まではバラバラのものに考えていたけれども、これをひとつのものに考えなきゃいけないなと、ふと思ったんですね。

私もそれまでは海ばっかり見ていて、反対側のことを振り向くなんてことは無かったわけです。これはやっぱり自分の川の流域を河口から上流まで見なきゃいけないってことを初めて思いまして、大川という川が削った谷、そういうリアス式海岸ですから、大川の河口から初めて上流へ上がって行くことをしてみました。25キロほどしかないわけですから、たいした事は無いわけですよね。ところが河口へ行ってまず見ましたら、みなさんも利根川の河口へ行って見てみてください。どういうところか。ゴミが凄いですよ。河口っていう所は、人間そのものが見えてきますね。それからもう日本の場合は、結局上流はダムで全部止まっていて、砂が流れ込まないですから、海岸が侵食されるんでしょ。だからどうしてもテトラポットを入れなきゃいけないんですよ。それからもちろん、工業優先という時代が続きましたから。本当にフランスのロワール川の河口に比べてがっかりしたなぁと思いましたね。それで気を取り直して、少しずつ上がって行きまして、段々川が綺麗になっていきまして、そこにアユなんかもチラチラ動いております。それから秋ですから、サケも結構上がっているわけなんです。今、気仙沼湾に流れ込んでいる大川は、宮城県で一番サケが上がる川ですから、毎日沖では30トンもサケが捕れているんですよ。すごいサケの海域になっているんですけれども、それで今度はリアス式海岸ですから、川が削った谷ですから、両側は山が切り立って来ているでしょ。それがくびれているところがあるんですよ。そうして今まで、あんまり関心を持っていなかったんですけど、そこにですね、道路淵にでっかい看板が出てですね、新月ダム建設絶対反対っていう看板が前からあったんですね。でも自分たちは海で働いている人間だから、上流のほうでダムに賛成だ、反対だと言っている連中がいるけれど、私はあまりそんなことに関心を持たないと。でも、そこをダムなんかで潰されてしまったんじゃ、これはえらい事になるなとドキッとしましたね。そういう問題もあるんだと。だからフランスのロワール川の流域に比べて本当に日本人の川の流域に対する問題が横たわっているっていうことですね。そういうものが全部解決されないと、最終的に私たちの生活の場の汽水域も良くならないじゃないですか。これはえらい事だなと、そこで感じましてね。

そこで市役所の職員とかですね、うちの役場の職員とか行政マンにそういう話をしてみました。「フランスでこういう姿を見てきたんだけれども、川の流域がよくならないと、俺たちの住んでいるこの漁場もよくならないけれど、どうしたらいいべな。」っていう話をしてみた。そしたら、「そんな事言ったってさ、日本の行政システムっていうのは、縦割り行政というように、海の管轄は海の人間、行政マンがやるし、川は川、農地は農地、山は山、これは全部分かれているんだ。しかも

気仙沼湾に流れている大川の上流は岩手県だよ。県をまたいでさ、しかも海で働いている漁師が山の事まで口を出すなんて言ったらそんなことできないよ。行政マンの立場からしても、そんなこと出来ないよ。」という言いぐさなんですよ。「そんな事言ったって自然は全部つながっているじゃないか。そんな事言われても困る。じゃあ、ダムはどうするんだ。あんなところにダムを造られてしまったんじゃ、海はどうなるか目に見えている。」これは汽水域で商売をしていくっていうことは、大変なことだなっていうことをふっと感じましてね、それで行政はぜんぜんあてにならないところだ。学者も自分のところの細かい研究ばっかりしていて、全体として物事を考える視点を持っている方はほとんど少ないですよ。行政もアテにならない、学校の先生もアテにならない、学者もアテにならない、水産試験場の方もあてにならないと、自分たちで何かやるしかないかと。いう風なことで、ながながと話をしてですね、どうしたらいいかっていうことを考えたときに、フランスでのことを思い出して、仲間にそういう話をしてみましたら、じゃあ山の人が山に木を植えてもあんまりニュースにならないけれども、海の人間が山に木を植えたらニュースになるんじゃないかと。しかも上流の山に雑木林を作るって事は、誰にとっても迷惑がかかることは何もないと。むしろ川の流域に住んでいる人たち全員に益をもたらすことだと、いうふうなこともありまして、では大川の上流の室根山に落葉広葉樹の森を作るって事をやってみようか、っていうようなことをふっと思ったんですね。そうすれば、流域の人たちがここをみんなで振り返って見てくれるんじゃないかと。だから、科学的なメカニズムがどうだとか、その時は一切わからなかったんですね。ただ何か行動しなきゃしょうがないという風に思ったわけですね。

それでそういう事を起こすにはですね、何かスローガンがいるだろうと。お前が言い出しっぺだから考えろと。私のおじさんがたまたま大川の中流域に住んでいて、そのおじさんが言うにはですね、大川の流域にも、歌詠みとか、書家とか、絵を描く人とか、そういう文化人もいっぱい住んでいたと。熊谷武雄という歌詠みが昔いたんだと言っていたんですね。宝鏡寺っていうお寺にその人の作った歌の歌碑が建っているっていうことで、どういう歌か教えてくださいって言ったら、こういう歌がそこに刻まれているっていうことなんです。手長山っていう山が気仙沼湾の背景にあるんですけれどもね、「手長野に木々はあれどもたらちねの柞（ははそ）のかげは拠るにしたしき」ちょっと難しいですね。手長山に木々はあれども、それくらいわかりますよね。手長山にはいろんな木があるんだと。木々はあれどもたらちねの、たらちねっていうのは、歌をやっている方なら解るかと思うんですけれども、お母さんを強調する枕詞なんですね。たらちねの柞のかげは拠るにしたしき、「ははそ」って、何ですかって言ったんです。「ははそ」も知らないのかっていう訳ですよ。「ははそ」って私もそれまでぜんぜん知らなかった。木へんに作文の作の右側を書いて「ははそ」って読むんだそうですよ。ナラとかクヌギなんかの古い言葉だそうですね。つまり自然界の母って言っているわけですよ。技術的にはこの歌はですね、「たらちね」と、「ははそ」を母にふたつかけているわけですよ。「手長野に木々はあれどもたらちねの柞のかげは拠るにしたしき」よるは、昼夜の夜じゃない、近づくっていう意味ですね。手長山にはいろんな木々があるけれども、ナラの木の林の

そばにいくと、お母さんの側にいったように心が休まるよな。っていう歌ですよ。なるほど昔の人はやっぱりたいしたものだと思いました。それで、「おじさんその熊谷武雄の子孫はどうしているんですか」って聞いたらですね、今は孫の代になっていて、孫の熊谷龍子さん、りゅうこさんとお呼びする方の代になっているというんです。その方もどうも歌を詠んでいるということで、私は意を決してですね、その方にとにかくいい言葉を作るために何か知恵を出してもらおうということで、思い切って訪ねて行ったわけですね。高台の森の中にあります熊谷武雄の生家なんです。そこを訪ねて、熊谷龍子さんって方が現れたんです。やさしい言葉を使う森の妖精のような、そういう方なんで非常にドキッとしましたけれども、熊谷武雄について聞いてみたり、そういう事に力を貸していただけませんかと言う事で、話をしました。

熊谷武雄は明治に生まれて、大正年代にかけて活躍した歌人なんですけれども、若い頃から歌をやっていてですね、自分の自信作ができたので、与謝野鉄幹に送ったらしいですよ。明星で有名ですよね。そしたらですね、どちらかというと自然界を歌ったそういう歌ですよね。非常に酷評されるわけですよ。熊谷武雄は非常にがっかりするんですけれども、気をとり直して前田夕暮に歌を送ってみたんですね。当時、与謝野晶子、与謝野鉄幹に対峙するような形で白日社っていう短歌結社をやっていた前田夕暮は、与謝野鉄幹、晶子と違って熊谷武雄の歌を非常に評価してくれたんですね。それで前田夕暮の元には、朔太郎もいたし、北原白秋、それからもちろん啄木もいました。熊谷武雄の歌を前田夕暮は、熊谷武雄が死ぬまで、「詩歌」という雑誌に必ず入れて掲載し、そういうことで熊谷武雄も全国的に「田園歌人」と呼ばれまして、評価を受けました。

ところで私は海で牡蠣の養殖をしている人間なんだけれども、スローガンを一緒に考えていただけませんかという話をしたんですけれども、自分は山に住んでいるので、海のことはぜんぜんわからないっていう訳ですよ。じゃあちょっと海に来てくださいっていうことで、海に来ていただいてですね、船に乗せて牡蠣の養殖のいかだに連れて行きまして、牡蠣を引き上げてですね、じゃあ牡蠣をちょっとご馳走しますからと、真っ白い牡蠣を海の水で洗って食べていただいたら、本当にこういう物が森林の腐葉土を通ってきたプランクトンで育ってこういう風になっているのかなってことは、今まで考えたことも無いって訳ですね。それからホヤなんていうのもあるんですよ。それも塩水で洗って、食べてみると本当に美味しいと。これが森の恵みですかということで、こういうことが自然界の繋がりで、生まれてるってことにハッとされまして。そして今までは山のほうから海を見た事はあるんですけれども、海のほうから山を見たっていうのは初めてなんですね。それで非常にカルチャーショックだったらしいですけれども、やがて一首の歌が生まれて来たわけですね。「森は海を　海は森を　恋いながら　悠久よりの　愛紡ぎゆく」っていうんです。そういうことの中からですね、この「森は海の恋人」っていう言葉が生まれて来たわけですよ。

平成元年から始めまして、漁民が山に木を植えるっていうようなことが始まりまして、毎年木も植えていますけれども、もうひとつ重要なことは、先ほど何度もいいましたけれども、川の流域に住んでいる人間の意識が変わらなければ、やはり川も綺麗にならないし、山もちゃんと手入れでき

ないし、人間も水と一緒にさまざまなものを流していますから、そういう人間の意識が一番重要だなっていうことがわかって参りましたので、山に木を植え始めると同時に、私たちは川の上流の子供たちを海に呼んできて体験学習っていうのも同時に進行させたわけです。プランクトンネットって言いまして、プランクトンを採る網があるんですけれども、それを海にドボンと入れてですね、子供たちが来たときにそれを引き上げるんです。そうすると下に付いたガラスのコップの中にプランクトンがいっぱい採れるわけですよ。１個の牡蠣は一日200リットルの水を吸っていて、エラでプランクトンを濾して食べて大きくなっているんだけれども、牡蠣はどういう味を味わっているか、君たちも試してみないかっていうことで、プランクトンを全員で子供たちに飲ませるというようなことをやっているんです。海の中の水に溶け込んだものを最初に体の中にいれるのは、プランクトンというものだよという風なことを子供たちに伝えて、子供たちはあまりそれ以上のことを言わなくても何となくハッと感じるんですね。そして体験学習から帰ってですね、作文をよこすんですけれども、その作文にはこういうことが書かれている。「私たちは、畠山さんのところに体験学習に行って、次の日から朝シャンで使うシャンプーの量を半分にしました。」っていうんですよ。つまり何気なく使っているシャンプーとかああいう化学的なものはですね、海の生物、川の生物にとってはあまりよくないものだということを、なんとなくわかっているんですね。漁師は河口の汽水域で生活しているんだけれども、そういうことを子供たちに伝える役目があるってことが解りまして、平成二年から今まで12、13年続けて、６千人の子供たちを私たちは迎え入れました。そして、10歳で来た子も10年経てば20歳ですし、中学生なんか来るともう大学卒業しているんですよ。それで今、学校の先生になるんだとか、いろんなところにですね、働く子供たちが出てきました。山に木を植えてても50年かかるけれども、人間は20年で育つと私は思っているんです。だから教育は、やっぱり重要ですね。また大学の教育はもちろんですけれども、小学校のときから、或いは幼稚園の時からの子供たちの教育ですね。やっぱり最終的にはここしか希望は無いっていいますかね、私はそういうことを思ってずっと続けているわけです。そういうことが増幅されてきまして、我が気仙沼湾も少しずつ昔の海を取り戻しつつあるわけです。汽水域の植物プランクトンの光合成の力が全森林の光合成の力の約２倍と、地域政策を策定するする時の基準を当然変えなきゃいけませんね。

汽水の匂う州っていうのは、どういう意味かといいますと、私は文藝春秋の『諸君』と言う雑誌に連載を頼まれまして、タイトルをつけたんですけれども、２年かけて日本の海岸をぐるっとまわり、毎月１回どこかの川の河口に立って、そこから何が見えてくるかっていうことを連載したんです。そこで思ったことは、やっぱり日本という国の周りは何処へ行っても淡水と海水が交じり合っていて、汽水が匂い立ってくる、そういう国じゃないかと。そうするとそういう国を最終的に守るっていうことは、新幹線や高速道路もいいんだけれども、もう一回ですね、縦の川の流域を見直して、それをベースにして地域づくりを考えていくと、思いもかけぬ世界がまたここから展開されてくるんですね。その汽水域で、牡蠣の養殖をして暮らしている私のようなものの立場から、これからも

地域経済或いは地域政策、そういう学問をされている皆様と何か接点をもてればいいかなという事を申し上げまして、今日の私の話をこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

講演講師プロフィール

畠山重篤（はたけやま しげあつ）氏

1943年、中国上海生まれ。宮城県本吉郡唐桑町在住。地元で家業の牡蠣養殖業を営む。

主要著書:『森は海の恋人』（1994年　北斗出版)、『リアスの海辺から』（1999年　文藝春秋)、『日本＜汽水＞紀行』（2003年　文藝春秋）などがある。

岩手県室根村から宮城県気仙沼湾に注ぐ大川を舞台とした漁民の森づくりで知られる「森は海の恋人」運動のリーダー。現在、牡蠣の森を慕う会代表。海の環境を守るには海に注ぐ川、上流の森を大切にしなければならないと1989年から漁民による植林運動をはじめる。環境教育や体験学習にも取り組み、これまで県内外から延べ6,000人の子どもたちを受け入れている。牡蠣の森を慕う会は、2003年度緑化推進運動功労者内閣総理大臣賞を受賞している。